

論文要旨

東アジア文化研究科・2019年度
『映画館のなかの近代—映画観客の上海史』
菅原慶乃

本論文は、20世紀前半の上海における映画観客の成立を紐解くものである。映画が上海に伝来した19世紀末から、中国映画の「黄金期」と称される1930年代までを対象として、(1)映画伝来から約半世紀の間の上海における映画鑑賞の実態を一次資料にもとづいて実証的に明らかにすると同時に、(2)マナーや教養の修得を前提とする「映画鑑賞」が社会に広がりつつあった新興中間層に実践されることで、「映画観客」という均質的な社会集団が確立したこと、さらにそのような集団が娯楽の領域において社会改良やナショナリズムを遂行しようとすることでネーション・ビルディングの一翼を担っていった過程を明らかにした。

本論文の構成は以下の通りである。

序章 映画観客とは誰か？

第一章 上海の遊歩者—映画観客はいかにして登場したか

第二章 「理解する」娯楽—映画説明成立史考

第三章 闇のなかの知的なささやき—肉声による映画説明

第四章 「猥雑」の彼岸へ—「健全」なる娯楽の誕生

第五章 刺激の近代—『閻瑞生』の変奏

第六章 映画館への通い方—映画鑑賞の成立

第七章 「肉感」と「健康美」のはざま—ポルノグラフィと「良き観客」

終章 映画観客史はどこへ向かうか？

序章「映画観客とは誰か？」では、従前の中国映画興行史・観客史研究に通底する「発展」史観が持つ問題点を整理し、この史観によって強化された映画鑑賞の「国家のイデオロギー装置」としての役割を明らかにするという本論文の目的を述べた。

第一章「上海の遊歩者—映画観客はいかにして登場したか」では、最初期の映画受容の主要経路である庭園・劇場・茶園、そして新式学校などの映画受容の実像を概観するとともに、映画上映に欠かすことの出来ない近代都市の余暇活動「遊歩」について考察を行った。

第二章「理解する」娯楽—映画説明成立史考」では、初期の映画上映が科学パフォーマンスという教養的な娯楽として享受されたことに注目し、このことが後に、映画を「理解する」という上海独自の鑑賞美学の基礎となっていったことを論じた。特に、上海のジャーナリズムで確立した「図説」や「説明(書)」という独特の解説スタイルが、近代知を伝播するという映画の知的メディアとしての特徴を強調したこと、またそのような鑑賞美学が1920~1930年代には「映画説明書(電影説明書)」と称される印刷メディア(映画館プログ

ラム) の隆盛を引き起こした過程を論じた。

第三章「闇のなかの知的なささやき—肉声による映画説明」では、第二章で議論したような印刷メディアとは異なる方法によって映画を「理解する」という鑑賞美学が実践された事例を概観した。具体的には、日本における「活弁」と類似しながらも独自のスタイルでの映画説明を行った「解画員」、映画を解する観客が自発的に外国映画の字幕を翻訳し音読して周囲の観客に聞かせるという「お節介な観客」、そして鉱石ラジオを用いた同時通訳システム「イヤフォン（訳意風）」について詳述した。

第四章「「猥雑」の彼岸へ—「健全」なる娯楽の誕生」では、上海における「近代的」な映画鑑賞の成立に重要な役割を果たした上海 YMCA (上海基督教青年会) による幻灯・映画上映に焦点を当てた。第一節「上海 YMCA の映画上映実践」では、「健全」な空間で静謐裏に鑑賞行為に没入するという映画鑑賞文化を確立した上海 YMCA の映画上映の実態を明らかにした。第二節「ヘテロトピアの映画館—YMCA とその周辺」では、上海 YMCA において目指された「近代的」な映画鑑賞を市井の映画興行へと拡張した映画興行主(上海大戲院の曾煥堂、北京大戲院の何挺然、滬江影戲院の盧寿聯、孔雀電影公司の程樹仁) について詳述した。

第五章「刺激の近代—『閻瑞生』の変奏」では、中国初の長篇劇映画『閻瑞生』の成立過程を取りあげ、20 世紀初頭の上海に現れた様々な視覚メディアが、活字だけでは満足しない読者／観客たちの持つリアリティ志向と扇情への欲求を満たすことで急速に普及していった様子を明らかにした。

第六章「映画館への通い方—映画鑑賞の成立」では、映画人や小説家の日記を紐解きながらさまざまな映画鑑賞習慣が生み出された様子を浮き彫りにした。とくに、遅刻せずに映画を見ること、映画を見る前に作品情報を収集すること、さらには見た映画を映画鑑賞記や「映画小説」などの形で翻案すること等、映画鑑賞と同時にさまざまな文化的実践や習慣が誕生し、映画鑑賞が次第に「遊歩」から独立していった状況を実証した。

第七章「「肉感」と「健康美」のはざま—ポルノグラフィと「良き観客」」では、ポルノグラフィの規制を通じて「良き国民」としての「良き映画観客」が創出された過程を扱った。ポルノグラフィックな映画は「肉感映画」と称され、ヘテロセクシュアルの主流男性観客による性的快楽を満たしたが、他方でそれは「健康美」という近代的身体観に依拠した「健全なる娯楽」として、あるいはまた「科学」という名の下観察の対象としても受容された。特に後者の受容の文脈では、「肉感」に惑わされることのない「健全」な道徳・倫理観を持つ「近代的文明人」が映画観客のあるべき姿だとする言説がジャーナリズムで形成された。このようにして成立した「良き観客」は、「肉感」を積極的に批判し取り締まり社会改良に積極的に加担することで、「五四」新文化運動の精神を映画鑑賞という大衆娯楽において実践するという大義名分を得たのであった。

終章「映画観客史はどこへ向かうか？」では、民国期上海で成立した静座・静謐を是とする映画鑑賞習慣が、新中国建国後どのように拡張していったのかについて、基本的な見取り

図を示した。同時に、演劇や文学など隣接領域との連動関係の解明や今後考察すべき東アジアの他の都市との比較考察の必要性を指摘し、本論文の今後の課題について整理した。

なお、本論文は2019年7月に晃洋書房から出版された書籍『映画館のなかの近代—映画観客の上海史』（本文全300ページ）を博士学位請求論文として提出するものである。

以上